長陵新聞　第283号
（平成25年2号）
2013年10月31日発行

災害に強い医療供給体制を目指して

災害医療国際協力学分野　江川　新一　教授

ご挨拶

災害医療国際協力学分野を拝命しております江川新一と申します。東日本大震災において犠牲となった方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、御支援をいただいた全国、全世界の皆さまに心より御礼申し上げます。

災害医療と受援力

災害医療国際協力学分野は災害科学国際研究所（IRIDeS）のなかでも非常にユニークで、検索したかぎり世界にひとつしかありません。被災地単独では解決できないような災害時においてこそ、医療は1人でも多くの命を救うためにさまざまな協力をしなくてはなりません。災害医療国際協力学とつけられた名称には国際社会も含めて災害に強い医療供給体制（ネットワーク）を作り上げる意味が込められています。わが国の災害医療は1995年の阪神淡路大震災を契機に大きく進歩し、日本DMAT、災害拠点病院、広域搬送システムそして災害救急医療情報システム（EMIS）の4つができました。いずれも東日本大震災において重要な役割をはたしました。しかし東日本大震災では災害による健康被害が阪神淡路大震災とは異なる形で現れました。倒壊物による外傷は少なく、津波と低体温による死亡、長期化する避難生活によるさまざまな慢性疾患・災害弱者の顕在化、そして放射能の存在などです。広域・大規模災害において混乱を避けるのは困難ですが、すでにある災害医療対応・危機対応システムを知っていれば、よりよい支援を受けることができた、すなわち高い受援能力を持つことができた可能性があります。災害医療国際協力学は、支援のあり方とともに、支援を受けるために必要なことについても教育と研究を進めていきます。

外科医はなんでもできる

私は膵臓外科の専門家として臨床・教育・研究を行い、日本膵臓学会の膵癌登録、多内分泌腫瘍症の遺伝子診断、膵腫瘍の分子生物学、生物学的治療について研究してきました。教室員会委員長を2期務る間に長陵協議会をNPO法人化し、現在も事務局長として80人以上の臨床研修指導医を加盟病院に増やしました。合同病院説明会を開催し、加盟病院の研修医増加をめざしています。ブタを用いた臨床基本手技セミナーや、教育・研修ワークショップへの参加支援、きらりとひかる指導医の紹介などを通して研修指導のネットワークづくりをしてきました。これを活かして災害に強い医療供給体制づくりに貢献することが目的です。

首都圏直下型地震、東南海地震の発生が高い確率で予想されています。また、大型台風などによる水害・土砂災害、BNC（生物・核・化学）災害など人間社会は繰り返す災害と、その被害の都市型化、広域化、大規模化などの変化に対応していかなくてはなりません。外科医だからこそもつことのできる自由度を最大限に活かして、一般の医療従事者に災害時の対応をわかりやすく伝える教育にも力を注いでいきたいと考えています。新しい分野だからこそできることがあると考えています。なにとぞ関係各位のご理解、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

1987年 3月 東北大学医学部卒業
1987年 5月 竹田綜合病院外科研修医
1990年 4月 東北大学第一外科入局
1992年 4月 国立がんセンター研究所細胞増殖因子研究部リサーチレジデント
1994年10月 同、研究員（厚生技官）
1996年 3月 医学博士号取得（東北大学）
1996年 4月 東北大学第一外科助手（文部教官）
1999年 3月 ピッツバーグ大学外科腫瘍学客員研究員
2001年 5月 東北大学肝胆膵外科助手
2003年 4月 東北大学大学院医学系研究科消化器外科学分野・講師
2005年 6月 東北大学大学院医学系研究科消化器外科学分野・准教授